様式 C-7-2

自己評価報告書

平成２３年　４月１９日現在

機関番号：２２６０４
研究種目：若手研究（Ｂ）
研究期間：　2008～2011
課題番号：２０７２０１８３
研究課題名（和文）　近代コーカサス・フロンティア社会の形成－エニコロピアン家の活動を中心に－
研究課題名（英文）Making of the Caucasian Frontier Society: The Enikolopians in the Modern Era
研究代表者
前田　弘毅（HIROTAKE MAEDA）
首都大学東京・人文科学研究科・准教授
研究者番号：９０３７４７０１

研究分野：西アジア・中央ユーラシア史
科研費の分科・細目：史学・東洋史３１０３
キーワード：近代史、グルジア：アルメニア：イラン：ロシア、帝国とフロンティア、ディアスポラ、異文化接触、越境、国際情報交換、通訳の歴史

１．研究計画の概要
本研究の目的は、中東とロシアを結ぶ近代コーカサス・フロンティア社会の変容を明らかにすることである。特に、アルメニア人家系エニコロピアン家の広範囲な歴史的活動に注目する。この一族はグルジア王家の通詞を輩出し、拝命したエニコロピアンという名字そのものが「言葉の箱」を意味するなど、その出発点から多言語と民族越境的な性格を有していた。19 世紀にロシアがコーカサス地方を手中に収めた後、以前にも増してイスラーム世界との関わりを強める一方、係累はロシアや西欧とも深いかかわりを持った。東洋史と西洋史の狭間ととらえられがちなコーカサス地方を両世界の橋渡しの場所としてとらえ直すことにより、「境を越える」歴史研究を実行して、20 世紀の歴史学が隠蔽してきた伝統社会から近代世界への多層的な移行を明らかにする。

２．研究の進捗状況
本研究の具体的課題には以下の 3 点が想定される。(1) その重要な歴史的役割にも関わらず 20 世紀の国民史において半ば意図的に忘れられてきたエニコロピアン家について、成員の確定、系図の作成も含めて基本的な活動を多言語資料を用いて明らかにすること (2) 具体的な動きについて史料に基づいて明らかにすること (3) 二つの帝国と現地社会に与えた影響の大きさを測るとともにディアスポラ研究や帝国史など幅広い議論に接続することで近代史研究に見直しを迫ることの三点である。このうち、(1) については、もっとも重要かつ基本的課題として家系と一族史の復元を意図していたが、幸いトビリシの国立文書館等における史料調査が順調に進んだことで、グルジア語やロシア語による多くの文書を落手することができた。系図に関する情報についてはすでに読解作業も進み、基本的な系図の復元がすすんだ。(2) については、上記資料の解析により、様々な新たな史実を見いだすことができた。特にロシアとイラン双方に仕えた兄弟の「距離」について示唆する様々な興味深い資料を参照することで、帝国に使えることの意味について新たな視角を得た。(3) に関してもインドにおける異人エリートの歴史研究などを参照しつつ、論文を執筆し、投稿している。このほか、一族史についてはウィーンでの子孫の発見と聞き取りなど、予想以上に成果が上がっている。複雑な近代社会への移行の中で、同家の対応は決して例外的なものではなく、当時のコーカサスの旧エリート層が様々な複合アイデンティティを活かして生き残りを図った一つの興味深い事例と位置づけることができるのである。(684 字)

３．現在までの達成度
②おおむね順調に進展している。
（理由）
資料の収集および読解、ならびに成果の公表について、それぞれ順調に推移している。ただし、一族の活動舞台は半ば予想通り多国籍・広範であり、全体像を描くという意味では未完成な部分があり、順調に所定の目的は達しつつあるも、今後の展望を描く必要を強く感じている。

４．今後の研究の推進方策
残り一年での成果のまとめに向けて以下の

ように研究を推進していく。
（１）系図の確定作業と広がりの確保。この点に関してはすでに想定以上の成果を得ているが、これまで収集した資料をつきあわせることでもう一度確定する必要がある。系図復元に際して利用した多言語史料とその来歴の解明は本研究の大きな成果となる。
（２）「越境」実態の解明。これまで収集した資料の中でも特にモスクワとトビリシで入手したロシア語の史料は 19 世紀におけるエニコロピアン家の活動を浮き彫りにする上で重要である。とりわけ 19 世紀半ばにイランから「帰還した」エニコロピアン家に仕えた農奴女性の「移動」に関する文書を最終年度で解析することで、エニコロピアン家成員だけではなく、その周囲の人間も含めて社会史として本研究の深みを増すことを企画している。
（３）理論の精緻化および成果の共有に向けた作業。特に海外の研究者との意見交換の機会を多く持つことで、本研究の位置づけをより明確にする。そして、本研究の成果の発信に努める。

５．　代表的な研究成果
〔雑誌論文〕（計７件）
①前田弘毅・高階義行、「コトバと記憶―記憶の重層性と「語り」の多様性」、『コトバと記憶―記憶の重層性と「語り」の多様性』、3-5、2010、査読無し
②前田弘毅、「グルジアで語り継がれる伝統：ギオルギ・ツォツァニゼ『熊』」、『民族紛争の背景に関する地政学的研究』、219－228、2010、査読無し
③前田弘毅、「サファヴィー朝期のグルジア語史料―著者の来歴を中心に」『歴史と地理』631 号、2010、25-32 査読無し
④前田弘毅、「飲み込まれない辺境『グルジア問題』を考える」『ユーラシア研究』41 号、11-16、2009、査読あり
⑤前田弘毅、批評と紹介「S.バーバーイー他著『シャーの奴隷たち』」東洋学報 90-3、2008、29-35 査読あり

〔学会発表〕（計６件）
①前田弘毅、「グルジア武人とサファヴィー朝権力」、九州史学会大会イスラム文明学部会、2010 年 12 月 12 日、九州大学（福岡県）
②前田弘毅、「飲み込まれない辺境『グルジア問題』を考える」、ユーラシア研究所創立 20 周年記念シンポジウム「よみがえるユーラシア―その光と影」、2009 年 4 月 18 日、立正大学（東京都）
③Hirotake Maeda、"An Armenian Family crossing Two Empires: the Enikolopian family between Iran and Russia in the nineteenth century"、Empires and Revolutions: Iranian-Russian Encounters since 1800、2009 年 6 月 12 日、ロンドン大学、英国・ロンドン
④Hirotake Maeda、"The Importance of Galust Shermazanian's Work for Iranian and Russian Relations and the Fate of Enikolopians in the 19th century"、Iran and the Caucasus: Unity and Diversity、2008 年 6 月 6 日、アルヤ大学、アルメニア共和国・イェレヴァン
⑤Hirotake Maeda、"Identity in Aleksandre Orbeliani"、Georgia: The Making of a National Culture、2008 年 5 月 16 日、ミシガン大学、米国・アン・アーバー

〔図書〕（計５件）
①前田弘毅、東洋書店、グルジア現代史、2009、63
②前田弘毅、明石書店、イスラーム世界の奴隷軍人とその実像：17 世紀サファヴィー朝イランとコーカサス、2009、402
③前田弘毅、北海道大学出版会、多様性と可能性のコーカサス：民族紛争を超えて、2009、221
④Hirotake Maeda、L'Harmattan, Paris、La Géorgie entre Perse et Europe、2009、49-66
⑤Hirotake Maeda、Artanuji, Tbilisi、Istorian、2009、533-537